

3. 第4回情報処理安全確保支援士試験に向けて

3-1 情報処理安全確保支援士試験について

平成 28 年 10 月 21 日、経済産業省からサイバーセキュリティ分野において初の国家資格となる「情報処理安全確保支援士」制度を開始する旨の発表が行われました。それによりますと、情報処理安全確保支援士制度は、「近年、情報技術の浸透に伴い、サイバー攻撃の件数は増加傾向にあり、企業等の情報セキュリティ対策を担う実践的な能力を有する人材も不足する中、情報漏えい事案も頻発しています。このため、サイバーセキュリティの対策強化に向け情報処理の促進に関する法律の改正法が本日（平成 28 年 10 月 21 日）施行され、我が国企業等のサイバーセキュリティ対策を担う専門人材を確保するため、最新のサイバーセキュリティに関する知識・技能を備えた高度かつ実践的な人材に関する新たな国家資格制度を開始しました」とされています。また、情報処理安全確保支援士は、「サイバーセキュリティに関する知識・技能を活用して企業や組織における安全な情報システムの企画・設計・開発・運用を支援し、また、サイバーセキュリティ対策の調査・分析・評価を行い、その結果に基づき必要な指導・助言を行う者です。サイバーセキュリティの確保に取り組む政府機関、重要インフラ事業者、重要な情報保有する企業等のユーザー側及びこれら組織に専門的・技術的なサービスを提供するセキュリティ関連企業等のいわゆるベンダー側の双方において活躍が期待されます」と説明されています。

こうした背景の基に、平成 29 年 4 月から情報処理安全確保支援士試験（以下、支援士試験という）が実施されるようになりました。この支援士試験は、これまでの情報セキュリティスペシャリスト試験の流れをそのまま受け継ぐものですから、午前Ⅰ、午前Ⅱ、午後Ⅰ、午後Ⅱという四つの試験が行われることには変わりありません。

平成 29 年度春期から平成 30 年度春期までの受験者数、合格者数などの推移を図表 10 に示します。なお、合格率については、平成 21 年度秋期試験の合格率（18.5%）をピークに、その後、徐々に低下し、おおむね 13%台ないしは 14%台で推移してきました。支援士試験としては、これまでに 3 回実施され、合格率は 16～17%台で推移しています。合格者の比率は、約 6 人に対して 1 人の割合ですから、しっかり準備して試験に臨めば、資格を取得することはそれほど難し

いというわけではないでしょう。

年 度	応募者数	受験者数	合格者数
平成 29 年度春期	25,130 (-22.7%)	17,266 (68.7%)	2,822 (16.3%)
平成 29 年度秋期	23,425 (-6.8%)	16,218 (69.2%)	2,767 (17.1%)
平成 30 年度春期	23,180 (-1.0%)	15,379 (66.3%)	2,596 (16.9%)

() 内は、それぞれ対前期比増減率、受験率、合格率を示す。

図表 10 応募者数・受験者数・合格者数の推移

3-2 出題予想

(1) 午前 I 試験, 午前 II 試験

平成 29 年度春期から平成 30 年度春期までの 3 期にわたる試験から判断すると、午前試験については、次のようにいえます。まず、午前 I (共通知識) と午前 II (専門知識) を比較すると、午前 I の出題範囲が広範囲にわたることなどから、合格基準点をクリアすることが難しく、午前 II は、午前 I がクリアできれば、比較的多くの受験者はクリアできるレベルのものと考えられます。ちなみに、午前 I 試験と午前 II 試験の合格率を示すと、図表 11 のようになります。

年 度	午前 I 試験	午前 II 試験
平成 29 年度春期	53.0%	77.8%
平成 29 年度秋期	47.9%	76.8%
平成 30 年度春期	58.2%	78.2%

図表 11 午前 I 試験と午前 II 試験の合格率の比較

平成 30 年度春期の午前 I 試験の合格率は、平成 29 年度秋期に比べると約 10 ポイント向上し、1 年前に実施された平成 29 年度春期に比較しても約 5 ポイント向上していますから、比較的高い合格率といえます。午前 I 試験の合格率は、変動幅が大きいことが特徴ですが、今回の 58.2% という数字は、ほぼ平均レベルの合格率といえます。このため、午前 I 試験を受験する必要がある方は、図表 4 で示した、幅広い情報処理技術分野の知識を十分に把握して試験に臨むことが必要です。なお、午前 I 試験には免除制度がありますので、この制度を利用できるよ

うに、応用情報技術者試験に合格するか、いずれかの高度試験の午前Ⅰ試験に合格しておくことも一つの方法です。

午前Ⅱ試験の合格率は、78.2%でした。約8割弱の受験者が合格基準点をクリアできるものですから、午前Ⅰ試験のように特段の対策を考える必要はないでしょう。例えば、午前Ⅱ試験の出題内容は、過去問題からの再出題が多いことが特徴ですから、過去問題を中心にしっかり学習していけば、午前Ⅱ試験は比較的容易に合格できると考えられます。このため、午前Ⅱ試験の対策としては、3期前に行われた試験の問題（平成30年度秋期試験では平成29年度春期試験の問題）を中心に、それ以前の過去問題を重点的に学習しておくこととよいでしょう。その反面、新規問題が増加したり、レベル4の出題数が増加したりすると、合格率は低下する傾向が見られます。このため、初めて支援士試験を受験される方は、あまり軽視しないことも必要です。

次に、午前Ⅰ試験の出題分野についてです。出題分野は、テクノロジー系（基礎理論、コンピュータシステム、技術要素、開発技術）、マネジメント系（プロジェクトマネジメント、サービスマネジメント）、ストラテジ系（システム戦略、経営戦略、企業と法務）の全分野にわたりますので、幅広い分野に関する知識が要求されます。平成29年度春期から平成30年度春期試験までの分野別の出題数は、図表12に示すとおりです。なお、午前Ⅰ試験で出題される30問は、応用情報技術者試験で出題された80問の中から抽出されていることが特徴です。

分野	大分類	平成29年 春期	平成29年 秋期	平成30年 春期
テクノロジー系 (17問)	基礎理論	3	3	3
	コンピュータシステム	4	4	4
	技術要素	8	8	8
	開発技術	2	2	2
マネジメント系 (5問)	プロジェクトマネジメント	2	2	1
	サービスマネジメント	3	3	4
ストラテジ系 (8問)	システム戦略	3	2	3
	経営戦略	3	4	3
	企業と法務	2	2	2
合計		30	30	30

図表12 午前Ⅰ試験 分野別出題数

午前Ⅰ試験の分野別の出題数は、基本的にテクノロジー系が17問、マネジメント系が5問、ストラテジ系が8問という比率になっています。情報処理技術分野の知識だけではなく、プロジェクトマネジメントやシステム戦略、経営戦略などの知識も要求されます。このため、日ごろから情報処理技術全般に関する知識を修得するとともに、出題数が多いテクノロジー系やストラテジ系に関連する過去問題を多く解いていくようにしましょう。しかし、午前Ⅰの出題分野の全分野に関し時間を費やしていくことは、あまりお勧めできません。例えば、論理回路の問題などは、考え方を理解するのに少し時間がかかります。こうした問題に時間をかけても意味がありません。捨てる分野の問題を決めながら、効率的に学習していくことが必要です。なお、支援士試験では、情報セキュリティの専門家の方が多く受験されると思います。特に、午前Ⅰ試験から受験される必要のある方は、午前Ⅰ試験が大きな関門となることがありますので、午前Ⅰ試験の対策には、手を抜かないことが必要です。

次は、午前Ⅱ試験です。午前Ⅱ試験の出題数は25問、試験時間は40分です。出題の重点分野は、技術要素のうちセキュリティとネットワークです。その他には、技術要素のうちデータベース、開発技術のうちシステム開発技術とソフトウェア開発管理技術、サービスマネジメントのうちサービスマネジメントとシステム監査の分野から出題されます。平成29年度春期から平成30年度春期試験までの分野別の出題数は、図表13に示すとおりです。

大分類	中分類	平成29年 春期	平成29年 秋期	平成30年 春期
技術要素	セキュリティ	18	17	17
	ネットワーク	2	3	3
	データベース	1	1	1
開発技術	システム開発技術	1	1	1
	ソフトウェア開発管理技術	1	1	1
サービス マネジメント	サービスマネジメント	1	1	1
	システム監査	1	1	1
合 計		25	25	25

図表13 午前Ⅱ試験 分野別出題数

午前Ⅱ試験の分野別出題数は、これまでの傾向から判断すると、セキュリティ分野とネットワーク分野とを合わせて 20 問、データベース分野が 1 問という比率になっています。このため、技術要素から 21 問、開発技術とサービスマネジメントは、それぞれ 2 問の出題となっており、この比率は変化することはないでしょう。

なお、技術要素のうちセキュリティ、ネットワークは、出題の重点分野である他、データベース技術を含めた技術知識については、午後試験対策を行う上で重要な位置付けにある技術知識です。このため、これら三つの分野の技術については、十分に学習していくことが必要です。そうすれば、午前Ⅱ試験で出題される技術要素分野の問題は、ほぼ全問正解できるレベルになってくると考えられます。例えば、技術要素から 21 問出題された場合には、少なくとも 15 問以上は正解できるようになるでしょう。15 問正解できれば、合格基準点に達します。このため、午前Ⅱ試験は、特別な対策を実施する必要はなく、午後対策に必要な技術知識を十分に身に付けていく方がよいと考えられます。

(2) 午後Ⅰ試験、午後Ⅱ試験

午後Ⅰの試験時間は 90 分で、3 問の中から 2 問を選択して解答します。最近の傾向としては、3 問のうち、1 問は Web サイトのセキュリティないしはセキュアプログラミングに関する問題が出題されます。このため、できるだけ HTML やセキュアプログラミング関連の知識を身に付けておくことが必要といえますが、問題を解くレベルまで到達するには、相当の時間と努力が要求されます。問題選択に当たっては、あらかじめセキュアプログラミングに関する問題を選択するかどうかを決めておくとういでしょう。この他、一度選択した問題については、最後までやり抜くようにすることが必要です。それは、問題文をよく読んでいけば、問題の中にヒントが記述されていることが多く、それらを手掛かりにして正解を導いていくことが可能だからです。しかし、ヒントを見つけることができるかどうかについては、各自が持ち合わせている知識が多いか少ないかなどの差によって決まります。

そこで、試験を受験するに当たっては、できるだけ技術レベルを向上させておくことが必要です。例えば、セキュリティ技術では、Web アプリケーションなどにおけるセキュアプログラミングをはじめ、メッセージ認証、本人認証、デジタル署名、電子証明書の検証方法、暗号化技術、ネットワークやデータベースに

対する様々な攻撃とその対策、セキュリティプロトコル、VPN 技術、ファイアウォールの設定、IDS や IPS、迷惑メール対策など、多くの技術知識を吸収していくことが必要です。また、ネットワーク技術分野では、TCP/IP (HTTP, HTTPS, IPsec, TLS など) やインターネット利用・接続技術、DNS の仕組み、電子メールの配送の仕組みなど、データベース技術分野では、データベースに対するアクセス制御、SQL 文、RDB、データベースの排他制御やリカバリなど、幅広い技術を修得していく必要があります。さらに、JVN (Japan Vulnerability Notes) として公表されている脆弱性情報のうち重要なものや IoT のセキュリティなど最近の動向、情報セキュリティポリシーやリスク分析などのマネジメント系の問題も出題されるので、幅広く知識を吸収していくことが必要です。また、JIS Q 27001 や JIS X 5070 などの標準化動向の把握も忘れないようにしましょう。

次に、午後Ⅱ試験です。試験時間は 120 分で、2 問の中から 1 問を選択して解答します。午後Ⅱは、問題分量が 10 ページ以上にわたりますので、問題をよく読んで、解答を導いていくという基本的な姿勢を貫くことが大切です。そうすれば、正解を導くことができる問題が必ず出てきます。情報セキュリティに関する一定の技術知識を身に付けた上で、午後Ⅱ試験では、「あわてず、あせらず、あきらめず」という精神で臨むことが必要です。

また、午後問題の特徴は、出題内容が一つの技術に絞ったものよりも、複合的な観点から出題されることです。この傾向は、午後Ⅱ問題では特に顕著になります。そこで、セキュリティと、ネットワークあるいはデータベースの相互に関連した総合問題に対応できる技術力を養っていくことが必要になります。しかし、幅広いこれらの技術を十分に修得していくには、かなりの時間が必要です。試験の直前になってあせらないように、あらかじめ多くの学習時間を見込んでおき、計画的に学習していくことが必要です。また、一度、理解しても繰り返し技術知識をインプットしていかないと、すぐに忘れてしまいます。工夫をしながら継続的に学習していく姿勢を確立するようにしましょう。なお、試験問題では、単なる技術的な知識から解答する問題はそれほど多くありません。問題文に記述された内容に従って解答する問題の方が多いため、問題の記述内容を正しく理解し、その範囲内で考えていくとよいでしょう。そのためには、問題文に記述された内容を理解できるだけの基本的な技術力をまず身に付けていくことが必要です。また、午後試験は数十字程度の記述式で解答します。記述内容については、考え方

や根拠を明確に示す他、キーワードをしっかりと押さえた解答を作成することが必要です。

以上のように、情報処理安全確保支援士試験で合格するには、それなりの努力が要求されますが、合格すれば、情報処理安全確保支援士（登録セキスペ）の登録資格を有することができます。そして、登録申請など所定の手続きを経れば、正式に情報処理安全確保支援士として認められ、活動していくことが期待されています。学習計画をしっかりと立てて、支援士試験に合格できるように努力していきましょう。

3-3 平成 30 年度春期試験のデータ

(1) 午前 I の問題

共通知識として幅広い出題範囲の全分野から 30 問が出題される試験です。出題分野の内訳はテクノロジー分野が 17 問、マネジメント分野が 5 問、ストラテジ分野が 8 問で、これまでと同じです。また、出題された問題は、従来どおり全て同時期に実施された応用情報技術者試験 80 問から選択された問題になっています。

平成 26 年秋期試験から重点的に出題されているセキュリティ分野の問題が最も出題数が多く、これまでと同じ 4 問でした。また、新傾向問題といえるものは次の 5 問で、細かい知識を問う少し難しい問題だったといえます。

- ・問 8 ノード分割後の B+木構造
- ・問 9 NoSQL に分類されるデータベース
- ・問 10 ETSI で提案された NFV に関する記述
- ・問 13 VDI サーバのセキュリティ効果を生み出す動作
- ・問 24 EMS の説明

問題の出題形式としては、文章の正誤問題が 18 問（前回 19 問）、用語問題が 4 問（前回 4 問）、計算問題が 7 問（前回 4 問）、考察問題が 1 問（前回 3 問）で、前回と比べて文章問題と考察問題が減り、計算問題がかなり増えています。出題内容としては、従来、少し難しい問題が多い傾向にあった基礎理論の問題が、前回に続いて比較的解答しやすい内容だったといえます。しかし、全体としては新傾向問題が少し難しい内容で計算問題も増えたことから、従来に比べて少し難しかったといえます。

高度情報処理技術者の午前Ⅰ試験は出題範囲が広い中からの 30 問なので、対策としては、基本情報技術者から応用情報技術者試験レベルの問題を日ごろから少しずつ解いて基礎知識を維持することが大切です。

次に、出題内容全体を示します。下線を引いた問題は高度午前Ⅰ試験ではあまり出題されていない内容ですが、基礎知識を確実に理解していれば、用語問題は消去法で、計算問題は少し時間をかけて丁寧に考えることによって解答できる内容もいくつかあります。

- ・テクノロジー分野……ハミング符号，再帰関数，再帰的な処理，メモリインタリーブ，システム稼働率の計算，ページング方式の仮想記憶，マイコンにおける分周器の値，B⁺木構造，NoSQL，NFV，ビット誤り率の計算，クロスサイトスクリプティング，VDI サーバ，ファジング，セッションの乗っ取り，ソフトウェア実装プロセス，ペアプログラミング
- ・マネジメント分野……スコープコントロール，PDCA，構成管理プロセス，システム監査規程の最終承認者，システム監査項目
- ・ストラテジ分野……情報戦略策定段階の成果物，EMS，RFI，PPM，アンケートで意見収束させる手法，発注数量計算，固定資産除去損の計算，業務妨害行為を処罰する法律

出題される内容は、過去の応用情報や基本情報技術者試験で出題されたことがある基本的な問題が大半を占めます。高度系試験で専門分野の力を発揮するのは午前Ⅱ試験からになります。午前Ⅰ試験はそのための「入場券」に当たるので、試験対策としては、過去の応用情報技術者試験の午前問題を解き、余裕をもたせて7割以上正解できるよう確実に実力を付けてください。そのために、最近2年間ぐらいの応用情報技術者試験で出題された問題を解いてみて、理解できていない内容を中心に学習することをお勧めします。また、AI、IoT、ビッグデータ関連は新しい用語がこれからも出てくると思われるので、日ごろから IT 関連の話題には注目し、内容把握しておきましょう。

(2) 午前Ⅱの問題

25 問のうち、分野別の出題数は、「技術要素」から 21 問、「開発技術」から 2 問、「サービスマネジメント」から 2 問という比率でした。この比率は、平成 22 年度春期試験以降、同じですから、今後も変更はないと考えられます。なお、全

体的な難易度を評価すると、新規問題の出題数が平成 29 年度秋期試験から 1 問増加しましたが、過去問題の出題は平成 28 年度秋期試験から 7 問あったことなどから、前回並みの難易度と思われます。

技術要素

技術要素からの出題範囲は、セキュリティ、ネットワーク、データベースの 3 分野です。分野別の出題数は、平成 29 年度春期試験で、はじめてセキュリティが 18 問、ネットワークが 2 問になりましたが、前回及び今回とも、セキュリティが 17 問、ネットワークが 3 問という比率になっています。

セキュリティ分野の 17 問のうち、16 問が情報セキュリティ技術に関するもので、情報セキュリティ管理（マネジメント系）は 1 問でした。新規問題は、問 1（CVSS v3 の基本評価基準の説明）、問 2（HTTP リクエストヘッダを悪用した脆弱性）、問 4（エクスプロイトコードの説明）の 3 問でしたが、エクスプロイトコードの説明は、平成 28 年度春期試験でも出題されていますので、過去問題として扱っても差し支えないものです。これに対し、過去問題からの出題は、平成 28 年度秋期から 7 問、平成 28 年度春期から 1 問、平成 27 年度秋期から 2 問、平成 26 年度秋期と平成 22 年度秋期から各 1 問の他、平成 28 年度秋期と平成 25 年度秋期 AP 試験から各 1 問の計 14 問が出題されていました。17 問のうち、レベル 4 の問題といえるものは、問 2 だけで、その他はいずれも標準レベルの問題です。

ネットワーク分野の 3 問は、セキュリティ分野からの新規問題が少なかった分、新規問題が 2 問、過去問題が 1 問という割合になりました。新規問題は、問 18（ICMP を識別するためのヘッダ情報）、問 19（VLAN 機能を有したスイッチのポートの種類）で、問 18 はレベル 4 の問題といえます。過去問題は問 20（WebDAV の特徴）で、これは平成 28 年度秋期 NW 試験（SC では平成 24 年度春期）で出題されたものです。

データベース分野の問 21（コミット処理完了とみなすタイミング）は、平成 28 年度秋期試験で出題されていたものです。

開発技術

開発技術からの出題範囲は、システム開発技術とソフトウェア開発管理技術の 2 分野です。問 22（UML 2.0 の表記図法）は平成 26 年度春期試験、問 23（XP

におけるテスト駆動開発の特徴)は平成 28 年度春期 AP 試験で出題されたものです。

サービスマネジメント

サービスマネジメントからの出題範囲は、サービスマネジメントとシステム監査の 2 分野です。問 24 (IT サービスの可用性計算) は新規の計算問題、問 25 (監査人が報告すべき指摘事項) も新規問題ですが、いずれもレベル 3 の問題といえます。

(3) 午後 I の問題

午後 I 試験は、3 問の中から 2 問の選択です。問 1 として C++に関するセキュアプログラミングの問題が出題されましたが、全体としてバランスのとれた出題であったといえます。また、問 1 と問 2 は、全体的に小問数が少ないので、些細なミスを積み重ねると、合格基準点に達しなくなるおそれがありますが、問 3 は小問数も比較的多く、詳細な技術知識を要求されるものもないので、合格基準点をクリアできる点数を獲得することは難しくないでしょう。今回の午後 I 問題は、問題文に記述された内容や条件を十分に把握しながら、設問で問われていることに対して丁寧に取り組み、解答を作成していけば、合格基準点をクリアすることができるとおもわれます。

問 1 ソフトウェアの脆弱性

問題のテーマはソフトウェアの脆弱性ですが、C++を使用したプログラムで発生するバッファオーバーフローや Use-After-Free と呼ばれる脆弱性に関する問題です。C++に関しては、平成 26 年度秋期午後 I 問 1、平成 28 年度秋期午後 I 問 2 として、スタックバッファオーバーフロー、データ実行防止機能 (DEP)、アドレス空間配置ランダム化技術 (ASLR)、ヒープバッファオーバーフローなどに関する問題が出題されています。これらの過去問題を演習していた受験者にとっては、取り組みやすい問題といえます。しかし、C++に馴染みの少ない受験者にとっては、いくら演習を重ねていたとしても、今回は Use-After-Free と呼ばれる脆弱性が中心になっていますので、難しく感じられると思います。

問 2 情報セキュリティ対策の強化

問題のテーマは情報セキュリティ対策の強化ですが、Web メールサーバ、迷惑メール対策サーバ、外部メールサーバという三つのメールサーバの関係の他、DNS サーバのオープンリゾルバ防止機能、CONNECT メソッドによるプロキシサーバへの接続の問題点などを考察する問題が出題されています。ネットワークセキュリティに関する技術知識を有していて、かつ問題の条件を加味して解答を作成すれば、多くの小問に正解できると考えられます。難易度については、標準レベルの問題といえます。

問 3 LAN 分離

本問は、マルウェアによる情報漏えいを防止するための対策として、現状の LAN から研究開発 LAN と事務 LAN に分離する案についてのセキュリティを評価する問題です。必要な知識としては、ファイアウォールの基本的な機能や、利用者 ID・パスワードを盗聴する方法などに限られます。このため、問題の記述内容を十分に考慮し、設問で問われていることに対し、丁寧に取り組んでいけば、多くの小問に正解できると思います。難易度を全体的に評価すれば、やや易といえます。

(4) 午後Ⅱの問題

午後Ⅱ試験は、問 1 がセキュリティ対策の評価、問 2 が Web サイトのセキュリティというテーマですが、午後Ⅰ試験で Web 関連のセキュリティが出題されていなかったことから、問 1 も問 2 も、Web 関連のセキュリティに関する知識が要求される問題となっています。最近、Web 関連のセキュリティ問題を選択する受験者が増加する傾向にありますが、これまでは得意にする受験者は限られていましたので、今回は問 1 と問 2 の選択に迷った方も多かったと思われます。

問 1、問 2 とともに、Web 関連のセキュリティが占める問題の比率は、30～40%程度ですから、これらの分野を苦手とする受験者は、それ以外の設問で確実に得点していくことが、合格基準点をクリアするための条件といえます。また、記述式の設問が全体的に少ないので、1 問当たりの配点が 10 点程度になります。このため、合格基準点の 60 点をクリアするには、ほとんどミスが許されない状況と考えられます。いずれにしても、設問に関連した必要な記述箇所をよく読み返ししながら、解答を作成するように努力された方は、正解にたどり着くことができたの

ではないでしょうか。難易度を全体的に評価すると、平成 29 年度秋期試験とほぼ同程度と考えられます。

問 1 セキュリティ対策の評価

本問では、クロスサイトスクリプティング (XSS) 脆弱性について、反射型 XSS と DOM-based XSS に関する動作、サーバで共通管理者アカウントが使用されたときの証跡を取得する方法、DB サーバを DMZ よりも安全性の高いセグメントに設置する方法、製作パートナに貸与する図面の機密性を担保するための具体的方法に関する問題が出題されています。例えば、製作パートナに貸与する図面の機密性を担保するための具体的方法として DRM (Digital Rights Management) 方式とコンテナ方式が取り上げられていますが、コンテナ方式の方が、安全性が高い根拠を述べる設問 4 の三つの小問にどれだけ正解できるかどうか、合格基準点をクリアできるかどうかの分かれ目となりそうです。

問 2 Web サイトのセキュリティ

本問のテーマは、Web サイトのセキュリティですが、出題内容は、Web サーバにアクセスログが残らないケースや、Web ページの改ざんを検出する方法、Web サイトの脆弱性を判断するために必要となる情報、Web サイトに対する攻撃手法、画面遷移における脆弱性診断、外部に開発を委託する契約の検取条件に追加すべき記載内容、Web セキュリティガイドを改善するための方法が出題されています。これらの中で、Web サイト特有のセキュリティとしては、設問 4 の画面遷移における脆弱性診断に関するものに限られています。このため、受験者にとっては、問 1 よりも、問 2 の方が取り組みやすいかもしれません。問題が 15 ページにわたっていますが、問題の記述内容のポイントを押さえながら、それぞれの設問に丁寧に取り組んでいけば、正解が得られやすいといえます。